

本願寺御影堂 蓼股(かえるまた)の飛天・迦陵頻伽 写真提供:京都府教育委員会文化財保護課

2007(平成19)年7月20日発行

Buddhist Music — Newsletter

佛教音樂

ニュースレター

特集：法要と音楽

浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター
本願寺佛教音樂・儀礼研究所
<http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/>

2007(平成19)年5月

宗祖降誕奉讚法要(本願寺)に集まった宗門関係学校の生徒たち

佛教音楽 展望

時代に即した法要を考える上で無視できない
「音楽法要」と呼ばれる儀礼形態

研究所はこの問題をどのように捉え
どのように取りくんでいくのか…

ていだん

鼎談：「音楽法要」について考える 小野功龍 × 前田正樹 × 福本康之

研究所では、親鸞聖人750回大遠忌法要に向け、現代に即応した法要の創設をめざし、式務部とともに試行錯誤を続けています。その一方で、お待ち受け法要に向けての声も、全国各地で聞かれるようになってきました。それぞれに創意工夫を凝らし、準備を進められておられるようで、研究所でもその声にお応えすべく、取りくんでおります。本号では、これまでに創作・発表されてきた「音楽法要」を題材に、研究所の方針について、所長と常任研究員2名による鼎談の形でお届けします。

■音楽法要は「ここ一番」に？

小野：最近は、お寺の合唱団が参加して、いわゆる「音楽法要」を勤めた、という話をよく聞くようになってきましたね。

福本：確かに、研究所に寄せられる質問でも、音楽法要に関するものは、群を抜いて多いかもしれませんね。

前田：それと音楽法要は、落慶や住職歿職などの法要に際して、というケースが多いのではないでしょうか。

福本：確かに、常例法座でというのは聞きませんね。

小野：ということは、音楽法要は、お寺や門信徒の皆さんの思いが強い行事で勤修になる、と考えてよいでしょう。

福本：確かに、音楽法要を選択される理由としては、「記念に」とか「特別ですから」ということを口にされますね。

前田：おそらく「音楽法要」という背景には、どこか他所のお寺で、音楽法要で盛り上がっていた、という状況を見られたか、話を聞かれた、ということがあるでしょう。

福本：その結果、音楽法要に対する期待感が、あちこちで膨らんでいるのでしょうか。

小野：それで、言葉は適切ではないかもしれません、「ここ一番」には音楽法要を、となりつつあるんでしょうね。

■期待と不安の間で

小野：でも、期待しうるものがあっても、初めて取り組まれたときのことを思うと、ご住職の苦労は、我々の想像をはるかに超えるものではないでしょうか。

福本：確かに、ご住職の「うちの合唱団が音楽法要でとうんですが、どうしたらいいんでしょう」という悩みや、「うまくいくか心配です」という不安の声が聞かれますね。

前田：もちろんご住職が音楽好きで、という場合もあるでしょう。それでも、何らかの演奏グループがないことには、音楽法要を門信徒の皆さんと勤めることはできませんよね。

小野：何らかのきっかけでお寺に合唱団ができ、当初は法要の御法楽として、日頃の成果を発表していたんだと思います。それが、落慶や歿職といった法要を機縁に、「私たちのお寺のお祝いなんだから、お勤めにも何らかの形で参加したい」と発展したんじゃないでしょうか。

福本：これまでのケースを見てみても、やはりご住職の主導でというよりは、合唱団の皆さんとの熱意をご住職が汲み取って、という場合が多いですね。

前田：それに、合唱団は婦人会のメンバーを中心に構成されている場合が多く、合唱や西洋音楽になじみの薄いご住職にとっては、確かに悩みや不安は尽きないと思います。

福本：でも、音楽法要と決まれば、多くの場合は、合唱団の皆さんのが嬉々として、ああでもない、こうでもないと、ご住職と相談しながら法要作りを進められているようですね。

小野：ご住職にとって、門信徒に背中を押されて取り掛かり、門信徒に支えられて法要の日を迎えるということなんでしょう。皆さんの喜ぶ顔、満足そうな顔をみて、ご住職もまたニコニコ。ある意味、浄土真宗のお寺としては、理想的なあり方じゃないですか。

目次

* 佛教音楽展望	— 鼎談：「音楽法要」について考える	p. 2
* クローズアップ	— 大正琴：福本康之	p. 5
	奏楽は大正琴 — 大阪教区 川北組 専光寺の法要：前田正樹	p. 6
* 交流のひろば	— 北米開教区サンノゼ別院聖歌隊：西村郁雄	p. 7
『響け、湖国に！』 — 結成20周年：編集部			

■合唱はできませんが——それでも演奏で参加！

前田：それと、先日も取材に行ってきましたが、お寺の報恩講で、大正琴のグループが仏教讃歌を演奏したという例もあります。しかも、お勤めのあとでの御法楽ではなく、法要の奏楽が大正琴なんですよ（→本紙6ページ）。

小野：大正琴は、国民楽器といってよいほどの普及率を誇っていますし、お箏や弦楽合奏も演奏団体が数多く存在する楽器ですよね。

福本：そうなんです。ですから、こうした楽器を法要で演奏されているケースというのは、我々が知らないだけで、実は結構多いんじゃないでしょうか。

小野：その点は、研究所としても認識を改める必要がありますね。

前田：もっといえば、我々研究所のスタッフが把握している以外にも、全国各地のお寺では、いろんな楽器が音楽法要で演奏されているんじゃないですか。本願寺派だけでも、一万ヶ寺以上あるんですから。

小野：その意味では、一般寺院のもつ多様性といいますか、チャレンジ精神は見習っていかねばなりませんね。そこには、色んなアイデアやヒントがあるわけですから。

前田：それと、いろんな楽器で参加される場合、取材に伺った大正琴でのケースもそうですが、ほとんど全部が、『さんだんのうた』などを中心に構成される音楽礼拝や《音楽法要 重誓偈作法》によっています。

小野：つまり、仏教讃歌を歌う人たちを念頭に創設された音楽法要は、さまざまな楽器での参加ということをも可能たらしめているわけですね。

福本：音楽の趣味が多様化している現代においては、こうした視点からも、音楽法要にひとつの可能性を見出すことができるといってよいでしょう。

■伝統声明や雅楽にも期待

小野：そうなると、伝統邦楽を専門とする私としては、声明や雅楽の可能性にも触れておきたいですね。

福本：現代では、西洋音楽が「日常の音楽」となっています。だからといって、西洋音楽がどのような場合においても「現代に即した法要」に相応しい、というわけではないでしょう。

前田：さらにいえば、確かに、僧侶でない門信徒による声明のグループが、法要に参加するということは、あまり話題になりませんよね。でも考えてみれば、昔から行われて



きた「正信偈六首引き」によるお勤めこそが、それに当たるんですよ。

福本：ちなみに1934(昭和9)年には、「正信偈六首引き」での勤行の場合に限り、本山のお晨朝での助音が許可となる、つまり今で言うところの「大衆唱和」が認められているんです。確かそのときの『中外日報』紙には、それ以前なら参詣者、他の人に聞こえないように、口の中でモゴモゴというだけだったが、これで大手を振って…みたいなことが書いてありますね。

前田：つまり、おてつぎのお寺で勤められていた「正信偈六首引き」の大衆唱和という習慣が、門信徒の積極的な姿勢によって、本山でも認められたということですね。いいかえれば、合唱や合奏で法要に積極的に参加するというスタイルは、「新たな大衆唱和」でもあるわけですよ。

小野：それに、「ここ一番」の法要でも、伝統的な声明や雅楽による作法は、まだまだ圧倒的に数の上では多いはずなんですが。

前田：むしろ音楽法要が話題になるのは、盛り上がりや話題性の面ではないでしょうか。大きな行事で伝統的な作法が感動を呼んだ、という記事が今日でも見られるように、声明や雅楽は、決して力を失ったわけではないと思います。

福本：おそらく、雅楽や声明という音楽ジャンルの問題ではないでしょう。伝統声明は、ある意味お寺の法要では「当たり前」ですから、話題性の面では「音楽法要」の方が有利ですね。ただ明治以降、いつの時代でも「話題性」で記事となっているならば、逆に、それだけ認知度は高くないということもあるんですが。

■研鑽のための環境が必要です

前田：それに、音楽が感動を与えるのは、その楽曲の質もさることながら、演奏する者の力量にかかる部分も大きいと思われます。



*資料庫から — 資料が語るあの時あの場所：映画『無憂華 九条武子夫人』 p. 8

仏教洋楽人物プロファイル：仏教音楽とともに歩んだ半生 — 上村けい

歌ってみませんか：念すれば花ひらく（詞・坂村真民／曲・鈴木憲夫） p. 9

*情報コーナー — みる・きく・よむ：楽譜・BOOK p.10

研究所だより p.11

*本願寺文化にふれる — 本願寺 折々の文化：籠谷真智子 p.12



小野：いいにいくことですが…つまりは、僧侶の研鑽不足ですね。逆にいえば、僧侶がその気になって研鑽を積めば、声明や雅楽による作法も、西洋音楽に比べ異文化然(=非日常的)となっている今日でも、充分音楽法要に匹敵するだけの力を持つはずです。

前田：確かに、僧侶の研鑽不足は否定できない大きな要素かも知れません。でも、僧侶だけの問題でもないと思います。学びたくても、学べない現実もあるのでは。

小野：全国の僧侶にむけて、声明や雅楽の研鑽が可能な環境を整備することも必要ですね。

福本：その点は、音楽法要にもいえることでしょう。過日、宗達で定められた仏教音楽の指導員体制にも着手しなければなりませんね。

小野：ただどちらの場合も、研鑽システムができたとして注意したいのは、それが趣味としての技術のみの向上にとどまるようなことの無いようにということです。法要で演奏するということは、**趣味ではなく、儀礼行為**なんですから。

■どう考るべきでしょう

前田：それと、宗教儀礼そのものが世俗化あるいは形骸化している、という現実も大きな問題でしょう。

小野：儀礼というと、一般には、法要など僧侶が行なうもので、参拝者はそれを見る側、というイメージがあると思います。しかし、法要に参拝すること、つまり「**儀礼が行なわれている空間に身をおくこと**」自体もまた、れっきとした儀礼ですよね。

前田：だからこそ、演奏を通して参加される方には、趣味を通してではあるけれども、演奏という行為は、参拝者の皆さんに鑑賞してもらうためではなく、それ自体もまた儀礼なんだという認識に立って臨まねばならないわけですね。

福本：音楽法要に関する質問などでも、「**儀礼として考えた場合**」という前提に立つことで解決できることが多いですね。

小野：例えばどのような？

福本：比較的多い質問に、「音楽法要でコーラスの部分を担当する讃嘆衆は、参拝の方に向かって歌ってよいか」というものがあります。

前田：おそらく、合唱団のメンバーにしてみれば、せっかく歌うんだから、皆さんに仏教讃嘆歌を聴いていただきたいので、お参りされている方々の方に向いて、と考えられるでしょうね。

福本：気持ち的には、たぶんそうでしょうね。でも、その理由としておっしゃるのは、歌を通してお法を伝えるのだから参拝の方を向くんだ、という論理、というか大義名分です。

小野：確かに仏教讃嘆歌は、明治以降、布教のためにと言われ、推奨されてきた歴史がありますし、一見その意見は正しいように聞こえるかもしれません。でも、それは「伝道」という視点での話であって、音楽法要でコーラスを担当するという「儀礼」行為を説明する理由にはなっていませんよね。

前田：わが宗門の場合、「法要とは仏祖を礼拝供養し、經典を読誦し、仏徳を讃嘆して、報恩の至誠を表す行事をいう」



音楽法要の一例（築地本願寺）

(宗門法規より)と、**儀礼的な規定**がなされているわけですから、讃嘆衆は、参拝者ではなく、阿弥陀さまの方に向かう、というのが当然ということが導かれますね。

■音楽だけではありません

福本：また音楽法要というと、どうしてもその名前からして、音楽ばかりに意識が偏りがちになります。でも、今のような例は、法要を構成する様々な要素にも、同じように言えることではないでしょうか。

前田：そうなんです、さらに言うならば、**音楽法要だけではなく、すべての法要や勤行に通じること**なんです。

小野：もっと踏み込んでいえば、意義付けなど不可能な部分も出てくるはずなんですね。

福本：また音楽の例になりますが、具体的にどのジャンルの音楽を用いるべきか、といった問題などは、教義だけで論じられるものではないでしょう。「美しい音楽」や「妙なる音楽」というニュアンスだけなら可能ですが。

前田：抽象的な表現になると、判断は各個人の主觀によらざるを得ませんから。それと音楽には、かならず何らかの「**イメージ**」がついて回りますから、それがどう作用するかもまた大きな問題でしょう。

■時代に即した法要とは

小野：そもそも儀礼というのは、感覚的なものといいますか、身体つまり**五感に訴えかけるもの**ですから、もう理屈じゃないんですね。

前田：浄土真宗の場合、こうした儀礼を通して、**お淨土を身边に「感じられるか否か」**が問題なんじゃないですか。

福本：最近は、お念佛の声が聴かれなくなりつつある、ということをしばしば聞きます。その一方で、今の門信徒は、住職以上にモノを知っている、という声も聞かれます。もしかしたら、お淨土について、頭で理解できても、身近なものとして感じられない状況にあるんじゃないでしょうか。

前田：よく、浄土真宗のお寺の内陣は、お淨土を**イメージ**したものだといわれますね。おそらく昔は、お御堂に入ると、お莊嚴をみてお淨土を想い、法要にあってお淨土を身边に感じることができたのでしょう。

小野：お淨土を身边に感じることのできる儀礼づくり、そして自然とお念佛の沸き起こる儀礼づくり、それが私たちの課題ですな。



大正琴

常任研究員 福本 康之

大正琴をご存知ですか?——この楽器、巷にあふれるコンサートやテレビの音楽番組では、ほとんど見る機会がないかもしれません。しかし、各地で開かれているカルチャーセンターには、必ずといって良いほど大正琴の講座が置かれていますし、新聞やテレビの通信販売でも、この楽器をご覧になられた方は決して少なくないはずです。

実はこの大正琴、愛好家数が100万人とも言われており、日本の国民楽器といつても過言ではありません。私たちの宗門で大正琴の演奏グループがある寺院というのは、決して珍しい存在ではないでしょう。

■創案者川口音海と大正琴の歴史

大正琴は、その名が示すとおり、大正時代に生まれた楽器（一説に発売は1912（大正元）年8月9日）です。

創案者は、川口音海（別名：川口仁三郎、本名：森田伍郎）なる愛知の月琴^{注1}奏者で、伝統文化にあふれる家庭環境にあった人物です（妻の赤堀鶴吉も日本舞踏の赤堀流二代目の家元）。その一方で、自身の西欧への渡航経験に加え、折からの和洋折衷楽^{注2}ブームもあって、おそらく音海は、西洋音楽と邦楽のどちらに対しても応用の利く楽器をと考えたのではないかでしょうか。そして八雲琴（二弦琴）の改良により誕生した楽器は、当初一応の完成を見た時期（9月9日の重陽の節句=別名「菊の節句」）にちなんで、「菊琴」と名づけられました。現在のように「大正琴」と呼ばれるようになったのは、さらに改良が加えられ、のちに十字屋（東京銀座）から発売された時のことだそうです。

そうして十字屋の協力により販売の全国展開が始まると、大正琴人気は一気に高まりを見せ始めます。その背景には、第一次世界大戦の影響で、それまで大衆楽器として人気を博していたハーモニカやアコーディオンの輸入が困難となり、これらに代わる楽器が求められていたという事情がありました。発売からまもなく、販売を一手に握っていた十字屋への一日の入荷量は、約1000台（小売店への卸しを含む）にも達したそうです。また大正琴に詳しい、及川尊雄（及川鳴り物博物館館長、東京都東久留米市）氏によると、ピアニオンをはじめ昭和琴、大勝琴など、当時様々な大正琴の類似楽器が発売されていたことが確認されています。その人気のほどは、創案者の音海にとっても予想を遥かに超えるものだったのではないかでしょうか。

しかしそんな大正琴も、昭和10年代に入ると戦時色の強まりとともに、次第にその音色は聴かれなくなりました。その人気が再燃するのは、日本社会が高度成長期に入った昭和30年代後半を待つことになります。昭和50年代

になると、大正琴のサークルの設立が各地で相次ぎ、様々な流派も誕生しています。そして平成5年には、大正琴発祥の地、名古屋を拠点とする社団法人大正琴協会が文部省（現文部科学省）の認可となりました。

■大正琴ってどんな楽器?

では大正琴とは、どのような楽器なのでしょうか?

構造としては、60数cm×10数cmの胴の上に5本の弦（音海による創案当初は2弦）が張られており、その弦を義甲（ピック）で弾くことによって音を出します。さらに音の高さは、弦の上に取り付けられたタイブライターに似た鍵盤（キー）を押すことによって変化する仕組みとなっています。

また楽譜は、一般に西洋音楽で用いられる五線譜ではなく、音の高さを数字で表した数字譜というスタイルで書かれています（写真参照）。こうした演奏の容易さや、数字譜という「おたまじゅくし」の苦手な人への配慮も、大正琴が日本中に広まった一因である、と今日では考えられています。



さらに昭和50年代からは、従来の大きさのものに加え、より低音域の演奏が可能なものも開発されます。その結果現在では、一番高い音域を担当するソプラノ（大きさとしては前述60数cm×10数cmサイズのもの）から順に、アルト、テナー、そしてもっとも低い音域を担当するベースの4種類からなるアンサンブル（合奏）も可能となりました。

近年では、こうした点への評価もあってか、義務教育で必修となった邦楽の時間への導入や、さらには東南アジアへの広まりも見られるようになっています^{注3}。

■仏教讃歌を大正琴で!

そうした大正琴の広まりは、近年私たちの宗門内でも、仏教讃歌の演奏という形で見られます。

例えば、兵庫教区の龍源寺(網干組、白川了一住職)では、ご門徒の松浦裕代さんが中心となって大正琴の練習に取り組んでおられます。松浦さん曰く、「仏教讃歌には、あたたかく馴染みやすい作品がたくさんあります。それらを大正琴で練習し、その成果をお寺で発表できることは、門徒の一人としてもうれしい限りです。」と。

ただし、大正琴で仏教讃歌を演奏するには、楽譜の問題があります。すでに述べましたように、大正琴の楽譜は、数字譜というスタイルで書かれており、仏教讃歌の演奏に際しては、五線譜から改めて書き起こさなければなりません。松浦さんはその点についても、すでに《恩徳讃》をはじめ55曲もの仏教讃歌を、大正琴用の数字譜として起こされ、出版されました。そのことが本願寺新報で紹介されると、松浦さ

んのところには、大正琴用の仏教讃歌の楽譜を希望する電話が数多く寄せられ、無償配布用にと準備された100冊の楽譜も、またたく間に無くなってしまったそうです。このことは、宗門内でも数多くの方が、大正琴に取りくんでいらっしゃる証といえるでしょう。

さらには、仏教讃歌を歌われる方々がそうであるように、大正琴の演奏で法要に参加するというケースもチラホラ見られるようになってきています。みなさんのお寺でも、大正琴を演奏されてみてはいかがでしょうか?

(楽譜については本紙10ページ参照)

注1 江戸時代から明治期にかけて流行した明清樂(中国から入ってきた音楽)の主要楽器。日清戦争時代に敵性楽器とされて以降日本国内では衰退。

注2 明治開国以降国策として積極的な導入をはかった西洋音楽と伝統邦楽を融合し、新しく日本独自の音楽を創ろうという運動。

注3 台湾では中山琴(ちゅうざんこと)の名で親しまれています。

奏楽は大正琴——大阪教区川北組 専光寺の法要

常任研究員 前田 正樹

■えっ! 大正琴の仏教讃歌で法要?

大正琴の演奏で法要が行なわれたと聞き、大阪教区川北組専光寺様まで取材に出かけました。

ご住職の江波正信師によると、大正琴の奏楽による法要は、昨年10月の「報恩講」に引き続き、今年4月の「総永代経法要」でも行なったということです。

頂戴した当日のリーフレットをもとに、次第をまとめると右段の表のようになります。これを見てもおわかりのように、仏教讃歌が随所に取り込まれ、すべての奏楽・伴奏は大正琴で行なわれています。ご住職の創意工夫が偲ばれます。

昨今法要は、「参加型」や「大衆唱和」をめざすようになってきました。そして、従来の雅楽・声明だけでなく、仏教讃歌の合唱や様々な音楽と共に営まれるようになって来ています。その一つの事例として注目されます。

■寺院活動の本來的なすがた

この法要是、大正琴を練習されている仏教婦人会の皆さんとの協力によって可能となったものです。別に着付教室の方も、献灯・献花にきもの姿で子供たちと参加されたりと、ご住職さんと門信徒のみなさんが、一致協力して「法要」を作り上げていらっしゃるのだなどと、強く感銘を受けました。

専光寺の仏教女性会会長の宮内栄さん、前田君子さん、そして竹中房子さんから、活き活きとしたお寺との関わりをお聞きしました。前田さんは、近隣の老人ホームの施設長であり、自分でも熱心に練習されるかたわら、演奏発表の場



所を提供されています。そして竹中さんは大正琴の指導者として古くからお寺とグループを繋いでこられました。

当日は、大正琴を縁として、お寺とは関わりのない方も参列され、ご法話を聴聞されるなど、波及効果も生まれています。お寺が地域に根付き、門信徒や地域の人びとと関わりながら、ご法義を相続されている本来のなり方を見せていただいたように思います。

総永代経法要の次第(2007年4月15日)

- | | |
|------------|---------------------------|
| 1. 行事鐘 | 奏楽《真宗宗歌》 |
| 2. 障子開扉 | 奏楽《四弘誓願》 |
| 3. 献 花 | 奏楽《しんらんさま》 |
| 4. 諸僧入堂 | |
| 5. 導師登礼盤 | 導師独吟に続き奏楽+合唱 |
| 6. 三帰依 | 奏楽+合唱 |
| 7. 念 仏 | |
| 8. 表 白 | |
| 9. さんだんのうた | 奏楽+合唱(1~5、20番) |
| 10. 恩徳讃(旧) | 奏楽+合唱 |
| 11. 一同合掌礼拝 | |
| 12. 法中退出 | 奏楽《法の御山》 |
| | |
| 13. ご法楽 | 大正琴演奏と全員合唱
《千の風になって》など |
| 14. 法 話 | 「信心の智慧」ご住職 |
| | |
| 15. 恩徳讃(新) | |





佛教讃歌と一緒に歌う喜び
—— それは何物にもかえがたく素晴らしいものです

皆さんの活動をご紹介するページです
投稿をお待ちしております

北米開教区サンノゼ別院聖歌隊

米国佛教団 名誉開教使 西村 郁雄

私の所属するサンノゼ別院聖歌隊についてご紹介します。聖歌隊は1950年、当時の英語部のコーディネーターを中心にはじめました。初代の指揮者には、サンノゼ市公立学校教育委員会のチェスター・メーン博士を迎え、同氏の弟子オースティン師にも指導を受けました。その後、ラリー・ヒルハウス師が指揮者となり、1952年には当時本派本願寺のご門主であった大谷光耀院下と大谷嬉子裏方を迎えて、最初の演奏会を行なっています。

1959年から1976年までは、故北條恵実師の由美子夫人が指揮者を務めてくださいました。北條夫人はサンフランシスコの公立音楽学校を卒業し、米国佛教団音楽部の委員の経験もある人物です。讃仏歌の作曲・編曲を行い、昔から歌い継がれてきた作品や新しい曲を紹介すると同時に、後進の育成に努めてくださいました。

北條夫人の引退後はナンシー・彦枝師の指導のもと、別院の三大法要(報恩講・花祭り・お盆会)で演奏を続けてきました。1993年から97年までは青木ゆみ子師に、そして

現在は再び彦枝師に指導をお願いしています。練習はサンノゼ別院の本堂を会場に、毎週火曜日の午後7時から8時まで行なっています。

また、カリフォルニア州にはサンノゼ、サンフランシスコ、フレスノ、オレンジ郡、サクラメント、パロアルトにも聖歌隊があります。2005年からは、これらの聖歌隊が集まって年に一度、演奏会を開催するようになりました。第一回はサンノゼ、第二回はフレスノで、そして今年(第三回)はパロアルト仏教会において、5月19日(土)に演奏会と研修会を行ない、親睦を深めました。

さらに、サンノゼ別院にはジュニア聖歌隊もあり、小学校4年生から高校3年生までの子どもたちが歌っています。サンノゼ市と岡山市の姉妹都市提携50周年を記念し、ジュニア聖歌隊は今夏、日本を訪ねる予定です。皆、日本の方々との交流を楽しみにしています。

これからも、皆でおみのりの歌を伝えてゆきたいと思います。

『響け、湖国に!』—— 結成20周年

編 集 部

滋賀教区の寺族婦人の方々によるコーラス・グループ「^{こー}響流(会長:橘篤子 彦根組願乗寺坊守)」が、活動20周年を迎えられました。

合唱団としての活動は、1987(昭和62)年に別院の法要などで佛教讃歌を歌うために集まつたことに始まるところ。お話を伺って、その歩みのなかで感心させられるのは、まず、発足当初から現在まで、入れ替わりはあるものの、常に60人以上というメンバー数を維持されているということです。しかし、佛教讃歌の広がりという点からすると、メンバーの皆さんのが歌うことだけではなく、それぞれの組や自坊へ戻り、そこで合唱団を組織しているという事実こそは、何物にもかえがたいものがあります。

そして、20年目にして初の演奏会を開かれるところで、要請を受けて研究所からも、その打合せの席にお招きいただいたのですが、皆さんの熱心なことといったら—— その光景を前にしただけで、この演奏会

はきっと成功するだろう、と確信したほどです。プログラムも、別院での奉告法要に始まり、メンバーによる合唱、指導者の先生方によるプレゼント演奏と内容も盛りだくさん。なかには、この合唱団で生まれた《歎異抄のうた》(→本紙「みる・きく・よむ」参照)や《湖国法城》といったオリジナルの佛教讃歌も演奏されます。

そしてこの演奏会の企画には、読者の皆さんにも是非知りたいプログラムがひとつあります。今回の演奏会を企画するに当たっては、一人でも多くの方と一緒に歌いたいというメンバー皆さんの想いから、教区の全寺院に向けて、一緒に舞台に立ちませんかと呼びかけられたそうです。その結果、50名の募集に対して80名の方が応募され、当日は、その80名全員と合唱団の方々を合わせた140名の大合唱で歌うことになったそうです。「響流」の皆さんのが、いかに佛教讃歌の輪を広げようと尽力されているか、演奏会がとても楽しみです。

■滋賀教区寺族婦人コーラス「響流」結成20周年記念

『響け、湖国に!』

*日時: 9月29日(土) 13:00~ *会場: 八幡別院

*問合せ: 滋賀教区教務所

☎0748-33-4256

資料庫から

連載：資料が語るあの時あの場所 第4回

映画『無憂華 九条武子夫人』

研究員 石川 紀久子

病床から、「また来ます」と最後のお言葉を遺し、お淨土に旅立たれた九条武子さま。そのわずか3年後の昭和5年、生前の麗しいお姿がスクリーンに再現されました。京都の東亜等持院撮影所が、武子さまの生涯を辿った伝記的映画『無憂華 九条武子夫人』を製作、公開したのです。

当時のポスターの記事によると、武子夫人役の女優（三原那智子）は、公募され審査を経た上で決定されたようです。面長ですらっとした容姿に、耳隠しに髪を結い、常に他人を慮る姿勢を崩さないそのお姿は、まるでご本人かと思われるほどで、この映画の一番の見所となっています。カメラは、武子さまの生涯を丹念に追いつつ、時に悩み、考え、仏とともに歩まれる一人の女性の心情に迫っていきます。お

そらく、武子さまの訃報を聞き、その突然の死を悼まれた沢山の人々が、この映画を前にして、深い感慨をお持ちになつたことでしょう。

一方で、この作品は、昭和初期の本願寺境内の様子や、その周辺環境、また当時の風俗を記録しているという点で、大変貴重な映像資料ともなっています。映画のクレジットには、本願寺の協力はもとより、武子さまと交流のあった歌人、柳原憲子（白蓮）が脚色を担当したとありますから、作品そのものが第一級の価値を持つ資料であることに間違はないと思われます。

*『無憂華 九条武子夫人』は、当初無声映画として製作されたものに、戦後ナレーションを加えたパートトーキー版があり、現在、このフィルムが京都文化博物館に所蔵されている。

連載：仏教洋楽人物プロファイル 第4回

佛教音楽とともに歩んだ半生——上村けい

研究員 山口 篤子

「なもあみだぶつ」の歌声が響く記録映画があります。そのなかにみられる和服姿の女性指揮者、それが上村けい（1897-1985）です。

上村は岩手県に生まれ、1918（大正7）年に東京音楽学校（現：東京藝術大学音楽学部）を卒業。京都市の小学校音楽科指導員や堀川女子高等学校（現：京都市立音楽高校）教諭として教鞭をとる傍ら、大正末期からは東京音楽学校の卒業生を中心に結成された京都混声合唱団のメンバーとしても活動し、京都の洋楽界の発展に貢献します。

そんな彼女が佛教音楽と関わるきっかけになったのは、1936（昭和11）年に開催された「佛教聖歌指導者講習会」（本拠本願寺布教部主催）でした。上村はこの講習会に講師として招かれ、やがて龍谷大学の学生たちに声楽の個人レッスンを行うようになります。そして終戦を迎えると、龍谷混声合唱団（本誌創刊号で紹介）の初代常任指揮者（1946-62）、京都女子大学教授（1950-66）に就任し、佛教音楽の創作や演奏に力を尽くしました。

映画で用いられている写真は、龍谷混声の演奏会で撮影されたものです。上村が亡くなつてすでに20余年が経ちますが、彼女の育てた合唱団は現在も活動を続けており、OBやOGも各地で佛教音楽の活動を支えています。彼女の遺志は今日まで脈々と受け継がれているのです。

*冒頭で紹介した映画（『京都市文化功労者活動記録保存事業 菊寿の会』第7部、1978年）は、京都芸術センター図書館で見ることができます。短いインタビューや、上村の自宅でのレッスン風景などが収められています。



龍谷混声合唱団を指揮する上村けい

連載：歌ってみませんか 第4回

《念すれば花ひらく》

(詞:坂村真民 曲:鈴木憲夫)

研究員 今小路 聰子

京都で活動するコーラス「ふじの花」から委嘱を受けた作曲家の鈴木憲夫(1953-)は、「仏教の心を、音楽を通して広く語りかけたい」との依頼者の願いに応えて、女声合唱組曲《二度とない人生だから》(2002、カワイ出版)を作曲しました。歌詞は、仏教詩人・坂村真民(1909-2006)の詩から10篇が選ばれています。この組曲の第1曲に收められているのが、《念すれば花ひらく》です。

坂村は、初め歌人を志し、故郷の熊本や朝鮮で教員を務めながら創作しましたが、終戦による引き揚げで愛媛に移住した後、41歳で詩の道に転じ、半世紀にわたって仏教精神に基づく1万余の詩を世に送りました。代表作ともいえる

「念すれば花ひらく」は、父の急逝後に女手ひとつで5人の子供を育て上げた母の労苦に報いるため、坂村が46歳のときに書いた詩で、母の名「タネ」を題名にいれた詩集『赤い種』(1956年)に掲載されました。坂村の「“念すれば花ひらく”を八字十音の真言として世の中に広めたい」との念願通り、日本各地はもとより海外でも愛唱者たちによって詩碑が建てられています。

「念すれば花ひらく」とは、一般的には、信念を持っていれば願いが成就する——と理解されるでしょう。しかし、真宗のみ教えとともに生きる私たちは、「わが名を称えよ」との阿弥陀さまの願いに応えてお念佛する自らの姿が、この上なく美しい花と讃えられていることを喜びつつ歌いたいものです。

*この曲は女声3部合唱として作曲されていますが、今回はメロディーのみ掲載しました。

カワイ出版 (ISBN4-7609-1581-8)

《念すれば花ひらく》

詞:坂村 真民
曲:鈴木 憲夫

*原曲は口長調

念すれば花ひらく
苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった

そうしてそのたび
わたしの花がふしきと
ひとつひとつ
ひらいでいった

JASRAC出0709057-701

情報コーナー

みる・きぐ・よむ

楽譜

《歎異抄の歌》

伊藤 法嶺 作詞
井上 壽子 作曲

「善人ヲモテ 往生ヲトク イハンヤ 惡人ヲヤ」——宗祖親鸞聖人がお亡くなりになったのち、一部の門弟の間では、聖人が示された真実の教えと異なる考え方が広がり始めました。これを著者(聖人の直弟子、唯円房とされる)は歎き、聖人から直接聞きとどめたお言葉をもとに、その本意を正しく伝えようとまとめたものが『歎異抄』です。

上記の第三条の冒頭など、『歎異抄』に見られる聖人のお言葉は、簡潔明瞭にして、その根底には他力の念佛に生きる徹底した姿勢が感じられます。その点こそが、今もなお広く世の人の心を惹きつけて止まない理由ではないでしょうか。さてこのたび、滋賀教区寺族婦人コーラス「響流」の皆様から、『歎異抄』を題材とした一連の佛教讃歌《歎異抄の歌》をご紹介いただきました。この作品は、『歎異抄』の第一条から第九条までをテーマとする9曲から成っており、作詞者によって綴られた各条のお味わいが、全編にわたって同じメロディにのせて歌われます。

『歎異抄』を題材としたこれまでの作品には、編成や演奏時間の点で規模の大きいものが多いですが、今回ご紹介いただきました『歎異抄の歌』は、佛教讃歌として誰もが口ずさむことのできる歌です。皆様もこの作品を通して『歎異抄』の世界に触れてみられてはいかがでしょうか。

※なお、楽譜に関するお問い合わせは当研究所までお寄せください。

大正琴の楽譜あります

研究所には「佛教讃歌の大正琴譜を探しているんだけど…」、という声が時折寄せられています。この度研究所では、そうしたご要望にお応えすべく、松浦裕代さん(兵庫教区網干組龍源寺ご門徒)の協力を得て、佛教讃歌の大正琴用楽譜を、曲単位のピース楽譜としてご提供させていただくことになりました。

まずは下記5曲の提供となります。楽譜をご希望の方は、研究所までご連絡ください。

【2007年7月発行分】

- *恩徳讃(旧譜)
- *敬礼文 *三帰依
- *念佛 *真宗宗歌

以下続刊予定



BOOK

『節談椿原流の説教者 —— 野世渓眞了和上芳躅』

直林 不退 著

近頃、節談が話題です。とはいっても、学術的な研究を含めてもその歴史的実態は、まだまだ謎に包まれたままであるのが現状です。そんな節談について、野世渓眞了なる一人の説教者に光をあて、一端を明らかにしようとするのが、この一冊です。

節談などの音声文化に関する研究といえば、一般には、テキストをもとに、その演目内容をとりあげるのが主流です。もちろん本書においても、説教者自身が遺した台本『帖外和讃談録』の翻刻をはじめ、『手控』(話をメモしたネタ帖のようなもの)など新発見の史料が紹介されており、これまで謎に包まれていた眞了あるいは椿原流(眞了の実兄椿原了義に始まる)の説教がどのようなものであったか、を窺い知ることが可能です。

しかし何といっても特筆すべきは、眞了が遺した『布教日誌』の類から、歴史学を専門とする著者によって、かつての節談説教者の活動や法座の実態が、克明に読み解かれているところにあります(第二章 真了の『布教日誌』と明治期の法座)。本書には、単に節談を取巻く状況の説明だけではなく、たとえ地震や大雪、列車事故などの困難が生じようとも、何とかして法縁を結ばんとする説教者と門徒(説教者を招くのは住職ではなく門徒が中心であった)の姿であり、そのどちらもの篤き思いこそが、お念佛に満ちた法座を作りあげている——この点こそ、著者がもっとも伝えたかったことの一つに違いないでしょう。

節談に関心がある方だけではなく、法座とは何か、改めて考え直すためにも、みんなに一読いただきたい書籍です。

■BOOKデータ

直林不退

『節談椿原流の説教者 —— 野世渓眞了和上芳躅』

永田文昌堂

2007年3月発行

ISBN978-4-8162-4038-6

定価4,200円(税込)



■著者略歴

直林不退(なおばやし ふたい)

本願寺佛教音楽・儀礼研究所委託研究員。

1958年群馬県桐生市生まれ。龍谷大学文学部史学科卒。同大学院文学研究科博士課程単位取得(佛教史学専攻)。

現在、浄土真宗本願寺派淨宗寺(滋賀教区・大津組)住職、並びに龍谷大学、花園大学各講師。著書に『日本古代佛教制度史研究』『大津淨土真宗寺院史』(いずれも永田文昌堂)。

研究所だより

御堂演奏会 2007 曲目決定!

恒例となっています御堂演奏会の2007年度演奏曲目が決まりました。録音も完了し、楽譜(CD付)の出版に向けて作業をすすめています。

演奏曲目は以下の通りです。

- | | |
|----------------|-------------------|
| 1)しんらんさま | 作詞:瀧田常晴 作曲:古関裕而 |
| 2)いのち | 作詞:藪田義雄 作曲:下総院一 |
| 3)みほとけは | 作詞:仲野良一 作曲:信時 潔 |
| 4)いのちまいにちあたらしい | 作詞:喜多内十三造 作曲:林 秀茂 |
| 5)ひかりあふれて | 作詞:原 真弓 作曲:綱澤 僚 |
| 6)念佛 | 作詞:山本有希子 作曲:森 琢磨 |

4)は2003年度のリバイバル、3)と5)は新編曲になります。1)2)6)は、2006年度と同じ編曲になりますので、昨年度に引き続き出演応募を予定の方は、『御堂演奏会楽譜2006』にて練習いただけます。

また、新編曲分を収録した『御堂演奏会楽譜2007』(出演応募はがき付)は**8月1日発売開始予定**です。(問い合わせ:本願寺出版社)また、事前にご予約をいただけます。

今年の演奏会の指揮・伴奏者は、以下の予定です。

■日程	■指揮	■伴奏
11月22日(木)	鈴木捺香子	森琢磨・石川紀久子
11月23日(金)	大分 哲照	森琢磨・藤林 由里

リハーサル会場として使用してきた《本願寺会館》は、2008年に解体されることとなり、来年度から使用できなくなります。したがって、従来どおりの形式で行なうことができるのも、今年が最後となります。ふるってご参加ください。

ただし、来年度以降も、益々充実した内容で開催し、親鸞聖人750回大遠忌法要がご修行になる2011(平成23)年には、より**大規模な演奏会**も行ないたいと考えています。

また、来年度は「御堂演奏会」も**20周年**となります。これを記念して、ピアノ伴奏版二部合唱楽譜「御堂演奏会名曲集」の出版も計画中です。合唱団やお寺の行事でも活用していくだけるものとの方針で編纂を予定していますので、どうぞご期待ください。

イベント情報

情報を待ちしています。
次号は12月下旬発行予定です。

●龍谷総合学園

第41回宗教教育研究会・第3分科会研修

日時:2007(平成19)年8月4日(土)13:00~16:00
場所:相愛大学 講堂

大阪市住之江区南港中4-4-1

内容:講演・舞踊 「宗教儀礼と舞踊」

講師:大谷紀美子 相愛大学客員教授
オルガン解説と演奏

講師:久保田清二 同大学教授

ヴァイオリン演奏(ソナタ:グリーグ作曲)

演奏者:小栗まち絵 同大学教授

児嶋 一江 同大学教授

主催:龍谷総合学園

後援:相愛学園/本願寺佛教音楽・儀礼研究所

■本願寺合唱団が当研究所付置団体に!

新たな歩みを始めた「本願寺合唱団」は、この度の宗達の一部変更により、正式に「本願寺佛教音楽・儀礼研究所」の付置団体として認められました。今後はさらに活発な活動を展開し、本願寺内外の行事に参加してまいります。

◎音楽監督・指揮 鈴木捺香子

(関西合唱連盟理事・京都府合唱連盟副理事長)

◎練習日 毎月第1・3月曜日 午後7時~9時

*時間についてはお問い合わせください

◎練習会場 本願寺佛教音楽・儀礼研究所 視聴覚室

京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地

本願寺第三庁舎

浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター内

■聞法会館「一緒に歌おう佛教讃歌」発表会開催!

佛教讃歌の素晴らしさを、より多くの方々にも知っていたとき、共に楽しく歌っていただくサークル活動として始まった「一緒に歌おう佛教讃歌」(毎月1回・第3水曜日開催)も半年が経過し、秋季彼岸会の期間中に、練習の成果を発表する会を行なうことになりました。ご本山参拝にあわせて、ぜひご来聴いただき、一緒に歌ってみてください。

◎開催日 2007(平成19)年9月26日(水)
11時30分~

◎会場 西本願寺 聞法会館 1階 口ビー

◎入場 無料

■本願寺佛教音楽・儀礼研究所 研究所スタッフ

2007(平成19)年度佛教音楽・儀礼研究所のスタッフは以下のとおりです。佛教音楽部門では、定本となる讃歌集の編集、「佛教音楽アーカイブ」の構築、新しい「佛教讃歌」の創作・編曲などを中心に活動してまいります。

◇所長 小野 功龍(音楽学・雅楽)

佐々木正典(仏教学)

◇常任研究員 齊田 智文(勤式)

福本 康之(芸術学)

前田 正樹(アート・マネジメント)

◇研究員 石川紀久子(音楽学)

今小路聰子(声楽)

多村 至恩(社会学)

波々伯部宏彦(音楽教育)

山口 篤子(芸術学)

家田 恭(音楽学)

戸田 直夫(音楽学)

尾家 京子(音楽教育)

籠谷眞智子(文化論)

鈴木捺香子(合唱音楽)

青木 義恭(声明)

荒川 恵子(音楽学)

小野 真(宗教哲学)

鹿多 証道(音楽教育)

寺内 直子(芸術学)

杜多 隆信(勤式)

直林 不退(歴史学)

藤田 隆則(芸術学)

丸山 千晶(ピアノ)

藤林 由里(作編曲)

◇研究 生 板井 智子・棘 麻衣子・佐々木恵利

鈴鹿 啓子・三浦 明利

本願寺文化にふれる

連載 本願寺 折々の文化 第5回

— 本願寺の七夕と盆行事によせて —



かごたに まちこ
籠谷 眞智子

京都女子大学名誉教授
本願寺佛教音楽・儀礼研究所 客員研究員

天文期(1533~1544)の本願寺の宗主は、證如上人と申されます。

證如上人は、天文期の芸能 — 茶道や花道を積極的にとりいれ、本願寺の文芸興隆につくされた方でした。したがって、日本文化史上でも、證如上人時代の本願寺の文芸には、めざましい発展があります。

たとえば、『證如上人日記』によれば、天文15年7月7日の例として、「花瓶 自所々 廿 瓶來」などとあって、證如上人時代の本願寺では、籠花(立花)がさかんであったことがしのばれます。

また、籠花の記録について、年とともに増加していくのがお盆の灯籠です。お盆の中心行事でした。



*西六条本願寺対面所 七夕籠花
「七夕の 篠花見んと 門徒達 星のごとくに 金をちらして」

たとえば天文年間のお盆に、ご本山へ納められた
燈籠と花瓶数を表にしますと、つぎのようになります。

天文五年七月七日 花瓶十七へい来候。

天文九年七月十四日 灯籠共(中略)卅也。

天文十八年七月七日 花瓶十八瓶來。

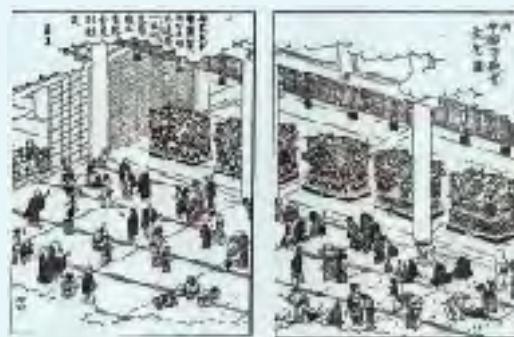
天文二十一年七月七日 十九瓶來。

天文二十三年七月七日 廿一瓶來。

上の表から、天文期の本願寺では、七夕や盆行事が盛んになっていることがわかります。

なお、『都林泉名勝図会』には、門信徒の方々は申すまでもなく、京都の町衆のあいだにも、七夕が楽しい行事として親しまれていたことが伺えます。本願寺は、信仰と文化が混在する“体験”的場だったのです。

さらに本願寺の七夕の籠花には、親孝行を主題とした「養老の滝」の場面もあります。大人に手を引かれたり、肩車の子供たちが、行儀よく見物している様子が見られます。本願寺の伝統行事に、子供のころから親しみ、文化財を大切にする「こころ」が育てられるのでしょうか。信仰や文化を大切に思う「こころ」は幼いころから育てたいと願っています。



*本願寺御堂 盆燈籠 「御堂ノ盆會 燈籠麗シ 佛智光明遠カラズト思ヒ
一タビ念ズレバ即チ極樂土に生ズ 多ク金寶ヲ投ゲテ 淚袂に滋シ」

■編集後記

◆今年も暑い季節に入りました。みなさんはいかがお過ごしでしょうか? 「地球温暖化」「環境問題」…。このような言葉が毎日のように聞かれる現代となりました。このままだと100年後には人間は滅んでしまうという科学者もいます。“なんとかしなければ”と思いながら、自分には関係ない気がする。この“私”的弱さなのかも知れません。あきらめや、無関心が最大の問題です。100年後を想い、できることから始めよう! いまここで生きている“私”が未来につなぐ存在です。

◆さて、私事ですが、4月1日の人事発令に伴い教学伝道研究センターに異動となり、はや4ヶ月が過ぎようとしています。本願寺佛教音楽・儀礼研究所では、宗門長期振興計画の推進事項「現代に即応した儀礼・法要の研究と創設」を担当しています。どのように推進していくか、いまの私にとって大きな課題であります。儀礼と佛教音楽を「文化」という大局的な視点から捉えるとともに、音楽の持つ大きな可能性を感じながら、社会とのかかわりについても考えていきたいと思っています。100年後を想いながら…。

(事務局 S)

■Webサイトもご覧ください

■バックナンバー、及び本号の追加配付、
新規購読希望は下記までお申し付けください。

『佛教音楽 ニューズレター』 第五号 (3巻1号)

編 集 本願寺佛教音楽・儀礼研究所

<http://www2.honganji.or.jp/ongaku/>

発 行 浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター
所 長 上山 大峻

〒600-8349

京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地

本願寺第3号舎内

TEL 075 (371) 9244 FAX 075 (371) 5761

発行日 2007(平成19)年7月20日

頒 価 無料